12/19
東日本

憲兵に機転「本はドイツ語」

無職　（茨城県　85）

憲兵は軍隊の警察だが、戦争末期には市民の取り締まりにもあたった。「憲兵」と聞いただけで身の毛がよだつ存在だった。その憲兵で思い出すことがある。

70年前の4月、私は旧制中学の3年生。学徒動員で水戸市の自宅から同じ県内の日立市の工場へ汽車通勤していた。その日は、同級生の海野君と参考書を見ていた。「英単語・熟語の研究」と英文で横書きされたポケット判。「敵性語」とされた英語だが、私の通う私立中学では講義があった。

その時、突然、男に「君らは何をやってる」と本を取り上げられた。「憲兵」と書かれた腕章を着けていた。恐怖が胸を刺す。2人は不動の姿勢で起立した。

海野君が言った。「それはドイツ語であります」。憲兵はパラパラとページをめくっていたが、「よし」と言って去っていった。

いぶかる私に、海野君は「三国同盟だよ」と言った。ドイツとは同盟国だが、とっさの機転に私は尊敬の念を覚えた。彼の一言がなければ、どうなったことか。

日中戦争 敵襲・徴発 父記す

小売業　（兵庫県　78）

1903（明治36）年生まれの父は37（昭和12）年7月に召集され約1年半、軍需品の輸送などを担う輜重兵として日中戦争で戦った。当時の日記から抜粋した。

【9月20日】（河北省保定で）多数の敵死体横たわり、なまぐさき悪臭だ。前線より絶えず銃砲聞こゆれど我が部隊は前線へ前線へと進撃を急な為乾パン生芋を食い泥水を飲んで渇きをいやし進む。

【10月15日】（山西省北部で）突然実に突然機関銃弾は雨アラレと飛来。すわ敵襲、応戦3時間。

【10月16日】突然不気味なるうなり生じ飛来たり爆裂の音すわ迫撃砲。敵襲という間もなく1発の炸裂弾にて一班澤井殺られる。馬を避難せよの命により危険をおかし馬を曳出、安全場所へ入れるうちから屋根に1発炸裂の為我は屋根土の下敷きとなり渾身の力を出してはい出し命拾いした。

【38年1月5日】母様らの写真が到着す。初永は随分大きくなっているを見ては1人ほほえむ。

【5月11～13日】（同省運城で）命と頼む食料当分来らずとの報に驚き全部隊を以て大々的の徴発（強制的に物を取り立てること）を行う。小麦、牛豚野菜等。近所の住民には気の毒なれど情けを掛けなば我は餓死し戦できず。

日記は12月4日、天津到着で終わる。輜重兵の仕事は後方支援だが、その父が攻撃を受けた。自衛隊が海外で他国軍を後方支援すれば攻撃の標的になると想像する。

客の食べ残しで生き延びた

無職　（兵庫県　87）

45年8月15日を私は台湾の陸軍師団司令部付き暗号手として迎えた。学徒兵だったので「復学できる」と喜んだが学校は休学同然。両親が経営するレストランは当時の中華民国の進駐軍に接収され、家族は銃剣付きで監視下に。治安は乱れ、おびえる日々が続いた。

翌年春、強制引き揚げのため、土地も財産も捨て、17年生まれ育ったふる里を後に、見知らぬ内地へ渡った。進駐軍の横流し物資の闇商売や、レストランの下働きで客の食べ残しを家族で分け合って食べ、飢えをしのいだ。

思えば私どもの世代に青春はなかった。私は本来5年制の旧制中学を4年で繰り上げ卒業。進学した師範学校は強制引き揚げのため中退。5年後、勤めながら大学夜間部に入学したが栄養失調で胸を病み中退。真っ当な生活を送ることはなかった。戦争さえなければ。戦争が憎い。

あれから70年、日本は安全保障法制の成立で、戦後かつてないほどの危機にある。若者に二度と同じ道を歩ませてはならない。戦争世代として切に思う。